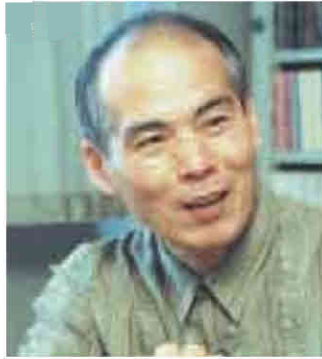


雑感

1969年(昭和44年)に入所したときには、平城宮跡の発掘は内裏正殿の南に広がるプレハブ建物群を調査事務所としていました。蚕棚のような木製の二段ベッドでの宿直もあり、鉄製の釜である五右衛門風呂に入った。翌年には今の資料館建物が新築され調査部はそこへ移転しました。このような平城宮調査の草創期の名残を知るのは、われわれの年代が最後ということになるのだろう。



西村 康さん

このころ、月に一回所員会議があり、春日野の本庁舎へ出かけていました。発掘調査関連の本以外は春日野にあり、皆はこの機会に図書をみることも心がけていたようです。自分にとっては、市内へ出かけるのは、まだ奈良を知らない状態であったので珍しく、楽しみでもありました。会議の後で、先輩たちにつれられて博物館の前にあった食堂で昼食をとるのが恒例で、奈良らしい田舎料理を味わえました。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むろん、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

このように、先輩でも若輩でも研究者としては同じであるという意識が、研究所全体にあります、ということが奈文研の活力を生み出す源となっているのではないかと思います。

これからも、この伝統が継承されていくことを願うものであり、これがある限り、奈文研は発展を続けると信じています。

(埋蔵文化財センター 西村 康)